

認知的方略と帰属スタイルの関連および学業的遂行への影響

主査：堀毛一也

社会学研究科 社会心理学専攻 博士前期課程

湊麻由佳

本研究では、個人が経験した出来事の原因帰属に見られる特徴的なスタイルである帰属スタイルと、将来の出来事に対する方略である認知的方略の関連、および認知的方略と帰属スタイルが学業場面に及ぼす影響について検討を行った。

まず研究1では、①達成および対人領域の帰属スタイルを測定し、領域ごとの帰属スタイルの楽観・悲観傾向が一致しているかどうか、②4つの認知的方略群を設定し、各群が自身の方略をどの程度受容しているか、③達成領域の帰属スタイルと認知的方略の関連、の3点について、大学生を対象とした質問紙調査による検討を行った。研究1の仮説は以下の通りであった。

- 1)達成領域と対人領域の帰属スタイルの楽観・悲観傾向は異なる傾向が強い
- 2)防衛的悲観主義者と一般的悲観主義者は自己受容度が低い
- 3)方略的楽観主義者と非現実的楽観主義者は自己受容度が高い
- 4)方略的楽観主義者と非現実的楽観主義者は、達成領域帰属スタイルが楽観的である傾向が高い
- 5)防衛的悲観主義者と一般的悲観主義者は、達成領域帰属スタイルが悲観的である傾向が高い

まず、達成領域と対人領域帰属スタイルの楽観的・悲観的傾向は一致する傾向が強く、仮説1)は支持されなかった。次に、認知的方略各群の自己受容度について検討した結果、防衛的悲観主義者と一般的悲観主義者は自身の方略を否定する傾向が高く、方略的楽観主義者と非現実的楽観主義者は自身の方略を受容する傾向が高かったことから、仮説2),3)は支持された。最後に、達成領域の帰属スタイルと認知的方略の関連を検討した結果、方略的楽観主義者と非現実的楽観主義者は達成領域帰属スタイルが楽観的である傾向が高く、防衛的悲観主義者と一般的悲観主義者は、達成領域帰属スタイルが悲観的である傾向が高かったことから、仮説4),5)は支持された。ただし、領域別帰属スタイルの傾向に関しては、傾向が一致しない人も一定数見られた。領域ごとの帰属スタイルの楽観・悲観傾向が異なる人に関しての検討はあまり行われていないため、今後検討する価値があると思われる。また、尺度の信頼性や一部の認知的方略群の特徴が先行研究と異なったことなど、今後の研究の課題もいくつか見いだされた。

研究2では、帰属スタイルの改善と認知的方略の促進を目的とする7日間の介入や学業へのモチベーションが、学業パフォーマンスや自己理解、学業態度に影響を与えるかについて検討した。帰属スタイルの改善にはポジティブ日記を、認知的方略の促進には自身の目標にその日どれくらい近づいたかを評価する(以下、コーピング)手法を取った。研究2の

仮説は以下の通りであった。

- 1) 帰属スタイルと認知的方略への介入群は、統制群に比べ学業パフォーマンスが向上する
- 2) 悲観主義者とメタ認知低者は、認知的方略介入によってパフォーマンスが向上する
- 3) 防衛的悲観主義者と悲観主義者は、帰属スタイル介入によってパフォーマンスが向上する
- 4) 楽観帰属者は、認知的介入によってパフォーマンスが向上する
- 5) 悲観帰属者は、帰属スタイル介入によってパフォーマンスが向上する
- 6) 学業へのモチベーションが高い人は、低い人より学業パフォーマンスが向上する
- 7) 認知的方略、帰属スタイル介入を行った人は、自己理解や学業態度が向上する

その結果、学業パフォーマンスの変化に対して認知的方略群の主効果に有意傾向が見られた。一方、帰属スタイルと介入群の主効果、および帰属スタイルと介入群、認知的方略と介入群の交互作用は有意ではなかった。また、介入の際に自己理解や学業態度、学業へのモチベーションなどの指標も測定して介入前後の変化も検討したが、いずれも有意な結果は得られなかった。有意傾向が見られた認知的方略群の主効果については防衛的悲観主義者と一般的悲観主義者のパフォーマンス変化が他の群より有意に多い、あるいは有意に多い傾向が見られた。したがって、研究2の仮説はすべて支持されなかった。この結果については、今回行った介入方法はいずれも学業目標を意識させるものであったため防衛的悲観主義者の方略と合致したこと、具体的な目標を意識させることで、回避傾向が高い一般的悲観主義者も何らかの行動を起こしたこと、などが考えられるが、介入方法や課題設定などに問題があった可能性もある。総合考察ではこうした点も含め、今後の課題について論じた。